



公立大学法人

静岡文化芸術大学

Vol.20

2025 春号

琥珀 石い風

SUAC
広報誌

私たちの フェアトレード

学生団体「りとるあーす」クロストーク／
SUAC フェアトレードのあゆみ／
学生おすすめ 浜松市内のエシカルスポット

// SUAC TOPICS //

週刊少年ジャンプ「赤塚賞」佳作受賞
企業の70周年ロゴマークデザインに採用
「日本学生BtoB新聞広告大賞」協賛企業賞受賞
モードのジャポニスム 深井晃子先生講演会
地域の魅力を伝える！カレンダー制作
4年間の集大成！「卒展」開催

Featured topic

研究室訪問

アート×多文化共生

の答えを探究して

文化政策学部 芸術文化学科
南田 明美 講師

アンフェアはどこにある？

私たちのフェアトレード

りとりあーす顧問 × 代表学生メンバー クロストーク

SUACのフェアトレード大学としての活動を牽引している学生団体「りとりあーす」。

令和6年度気候変動アクション環境大臣表彰の部門別最高賞「気候変動アクション大賞」を受賞し、益々の躍進を遂げています。

今回は、りとりあーす顧問の武田淳准教授と、代表学生メンバーにフェアトレードについてお話を伺いました。



関 あかりさん
りとりあーす
2024年度部長

栗山 はなこさん
りとりあーす
2025年度部長

武田 淳 准教授
りとりあーす顧問

栗山：私は小さい頃にフェアトレードのことを母に教えてもらいました。「このマークのものを買おうと貧しい人を助けられるんだ」と。それを知って貢献の意識が芽生えました。高校でSDGsを学ぶ中でフェアトレードや地域貢献に興味を持ちました。SUACがフェアトレード大学だと知って、同時にりとりあーすのことも知りました。この大学に入ったらフェアトレードの商品開発に携われるし、地域の人も関わられるし、自分の好きがいっぱい詰まっていたのでこの大学に決め、りとりあーすに入ることも決めていました。

武田：おお、すごい。昔から関心が高かったんだね。

関：私と違いすぎる笑。私はりとりあーすも、フェアトレード大学であることも知らずに入学しました。友達がりとりあーすの説明会に行くというので私も付いていくことになり、流れで入りました。フェアトレードは「応知っていましたが、お金に余裕がある人が買うものだと思っていて、身近には感じていなかったですね。

武田：そして流れて部長に数いるメンバーの中で関さんが部長になったからには、何か興味を持つきっかけがあったんでしょう？

関：私はデザイン学科ですが、他学科の授業を受ける制度を活用して、武田先生のフェアトレード論を受けました。それで、「アンフェアな今がおかしくて、フェアな状態が普通であるべき」と考えるようになりました。先生が実際に体験したエピソードはすごくリアルで、それでフェアトレードへの考え方が変わってきたと思います。

武田：僕の専門は文化人類学で、開発途上国の文化や生活を研究してきました。研究調査をする過程で、貧困や環境問題など、彼らが抱えている問題を目の当たりにする場面もあり、「我々の生活をどうにか変えてほしい」という話も何度も聞いています。今はフェアトレード大学に勤務しているし、学生たちとプロジェクトを実施する機会にも恵まれているので、今までの研究調査地への恩返しも兼ねて何かできればと活動しています。

フェアトレードのきっかけ

P.01 Pick Up Student

P.02-04 [特集] 私たちのフェアトレード
学生団体「りとりあーす」クロストーク

P.05 SUAC フェアトレードのあゆみ

P.06 SUACさん・ぼ特別編 学生おすすめ 浜松市内のエシカルスポット

P.07-09 SUAC TOPICS

P.10 SUAC研究の「いま」

P.11 研究室訪問(教員研究紹介Vol.12) 南田 明美 講師

P.12 キャリア支援室より

P.13-14 退任教員紹介／同窓会だより

SUAC
広報誌
碧い風

2025年 春号

contents

進取果敢に取り組む SUACライフ

高橋 優衣さん

デザイン学部 デザイン学科3年
三重県立松阪高等学校 出身

デザイン制作やイベントの運営企画、軽音部ではボーカルを担当し、ダンスサークルにも所属するなどマルチに活動されている高橋さん。

もともと絵を描くこと、おしゃれなものが好きという理由でデザインに興味をもちSUACに進学。授業では、デザインに込められた意味やデザイン要素がどのように印象へ作用しているかなど、多角的な視点で「デザイン」を分析することにより、深い学びを獲得できているとのこと。学びを通して培った自分のスキルを活かして、ポスターやロゴマークのコンペティションに挑戦したいという気持ちが生まれ、積極的に応募するように。そして「SUAC OPEN CAMPUS 2024」では見事に高橋さんの作品がメインビジュアルとして採用されました。大学のメインイベントであるオープンキャンパスで自分の制作物が多くの方々の目に留まるという初めての経験に胸が高まったとのこと。そして高橋さんのポスターを見て本学に興味を

静岡文化芸術大学のロゴマークを海に、これから入学する皆さんを海に飛び込む人に見立て、オープンキャンパスが皆さんの「静岡文化芸術大学」という可能性に溢れた海に飛び込むきっかけになってほしい、という思いを込めて制作されたデザイン。ポスターデザインは、チラシ、リーフレットやステッカーにも展開されました。



— pick up student —



◀「旅の記憶」というテーマで作品募集を行い、作品出展者13名による計44点の作品が集まりました。

もった高校生がいたとのこと、自分のデザインで人を動かすことができたという自信がつき、新しいことに挑戦することへのモチベーションにもつながっています。

また、以前からイベントの企画運営に興味があった高橋さんは、後継を探していた学生有志企画写真展「Finder」と出会い、後任として立候補、写真展「Finder file.2」を主催しました。企画・運営の難しさを感じながら、周りの方々に支えられて活動できていることをあらためて実感したとのこと。 「新型コロナウイルスの蔓延が落ち着き外に出る機会が増えた学生たちが、旅先で撮った写真を共有する機会を設けることで、写真作品として学生の日々の成果を発表・公開すると共に、作品を見た人に外出の意欲を高めてもらうきっかけを提供する」というコンセプトのもと、学内のギャラリーで実施したイベントは大盛況となりました。次回は企画を一から考え展示会をしたいと熱い意気込みを語ってくれました。

フェアトレードの フェアとは何か—— 誰かのストーリーを 想像してみる



フェアトレードタオルの商品開発

関：今年はフェアトレードタオルの商品開発をすることが一番嬉しかったです。

武田：ホットマンさんという東京のタオルメーカーが、フェアトレード認証の製品を作っていて、ある講演会で事例を発表されていたんです。講演をされていた方と偶然知り合ってそこから話が進みました。関さんの代のメンバーは全員デザイン学科なので、ものづくりに関心を持ちそうだなと思って。

関：本社に行つて見学させていただいたり、社長とお話させてもらったり、とてもいい経験になりました。スケジュール調整や、企業の方とメールするのも初めてで勉強になりましたし、物を完成させられたことがとにかく嬉しいです。デザイン学科でもプロトタイプは作るけど、商品として完成させ



るまではなかなか経験できないので。

栗山：タオルの刺繍デザインを二年生でデザインコンペしましたね。私たちも投票しました。

関：セネガルのコットンを使っているのでセネガルがキーとなるデザインを考えました。セネガルは海に面していることと有名な観光地にピンクの湖があることから、ピンクとブルーの波の模様と船のデザインです。セネガルから日本まで船で運ばれてくる様子と、遠く離れていてもつながっているという意味を込めて作りました。

武田：コットンというと衣料品が主で、圧倒的に中国とインドの生産量が多いです。しかし、実際に原料を調達している場所は西アフリカなども多く、世界中の縫製工場の下請けとなっているのがセネガルなどの国です。なので、そうした生産国から物を運んでくる船のデザインはストーリー性があつて僕はとても気に入っています。来年以降も商品開発の想いを引き継いで販売したいね。

カスカラティとは

栗山：コーヒー豆はコーヒーチェリーの種子からできていて、種子を取り出した後の皮と果肉は棄ててしまいます。その棄てられる部分を活用したのがカスカラティです。果皮の部分は生産地でも「カスカラ」と呼ばれていて、日本語でも「カスカラ生まれたい」としてダジャレみたいになつていて感動しました。

関：たしかに笑。良いネーミングだね。

武田：このプロジェクトは、気候変動対策

ヒストリーをよく知らない。でも、自分が当事者として語らなければいけなかったんだよね。

栗山：お客さんへフェアトレード商品のストーリーを伝えることも重要ですけど、私たちメンバー間でありとあるあーすのストーリーを理解して共有することも大事ですね。関：大学のサークルだからメンバーも入れ替わるし、同じ知識やモチベーションをキープするのは難しいですね。一人ひとり興味も違うから、みんなが自分事として参加できるよう試行錯誤しました。タオルの商品開発にあつても、私が部長でいるのは一年間なので、一回きりのフェアトレードだったから全然助けにならないし、フェアトレードとしてあるべき姿なのかとか、後輩メンバーがやりたいことか、邪魔にならないだろうか、などいろいろ悩みました。

武田：うんうん。でも、やってみたいんだよ。そのために僕がいるし、活動に賛同して協力してくれる企業さんもある。持続可能性をどう担保していくか、想いや歴史を伝えていくのは、顧問がいるサークルの強みだよ。

関：たしかに。じゃあ、栗山さんも安心して商品開発できるね。

武田：他には何か苦労したことや悩みはある？

栗山：価格設定が難しいなと思います。利益をどう配分するか、フェアでなければいけないのに、フェアを実現することの難しさを感じます。

関：販売していると、「これを買って生産者にいくら入るの？」と訊かれたりもします。武田：普通の商品について店員さんにそつ

となる商品をつくらうとしたのがきっかけです。今後、気候変動が進むとコーヒーの採れる地域が半分になるという試算があつて、気候変動下でもコーヒーの生産者が収入を得る方法はないかと考えました。開発に関わったメンバーは熱量もあるし語れることはたくさんあるけど、それを下の世代が受け継ぐのは大変じゃなかった？

関：販売するときに、どんな商品かを説明するのは苦労しましたね。商品開発の背景にはいろんなことがあります。お客さんはカスカラティを知らない方がほとんどなので、味や飲み方とかいろいろ質問されますね。

栗山：長く話してもお客さんが途中で興味を失ってしまうので、いかに短い言葉で興味を持ってもらうかいろいろ考えました。

武田：カスカラの廃棄によつて生ゴミが増える問題もあるから、環境問題として決して他人事ではないという面もありますし、端的にストーリーを伝えることが難しいですね。そつりあるあーすは昔から、「偉大な先輩をどう超えるか問題」がありまして…

りあるあーす 活動の苦労

武田：最初にフェアトレード大学に認定された時、その直後のメンバーは苦労したんです。フェアトレード大学にしたのは先輩たちで、その後に入ってきたメンバーは直接関わってはいない。だけど、世間から注目を浴びるので取材をいっぱい受けるんです。先方は学生たちの熱い言葉を期待してマイクを向けるけれど、当人はその

訊くことはないと思うけど、フェアトレード商品になるとそつりあるあーすが起きるんですよ。フェアトレードを好意的に受け取る人もいれば、懐疑的に見る人もいます。

これからのフェアトレード

武田：実はフェアトレードのフェアの概念は時代と共に変わり続けています。始まりは1940年代くらいで、初期は先進国と途上国の間だけでなく、戦勝国と敗戦国間のアンフェアの解消や、難民支援のためのフェアトレードなど多様でした。それが1980年代くらいから発展途上国支援が主流になつていき、今もそのイメージが強いかと思えます。でも、かつて途上国と呼ばれた国々も発展著しく、貧しいばかりではなくなっています。ですので、アンフェアを解消するが、現代では多様化してきています。例えば、日本国内のお茶農家のフェアトレードや、映画や出版業界の労働問題など農産物以外にもフェアトレードの概念を用いて、アンフェアをなくそうというムーブメントが広がっています。我々が暮らす社会で足りないものを補っていくのがフェアトレードだと考えると、りあるあーすの活動もさらに広がっていくのかなと僕は思います。

栗山：おもしろそう！早速サークルで話してみます。私は、日本でのフェアトレードの認知度が少しも上がるのいいなと思つているんですけど、足りないものを補つという考え方だと自分事として捉えてもらえそうです。

関：フェアであることが当たり前前のお互いに思いやれる社会になるといいですね。



関 あかりさん

【デザイン学部 デザイン学科 2年】

愛知県出身。絵や写真、動画、本が好き。鑑賞してインプットすることも、自ら創作してアウトプットすることも両方行う。料理が得意で自炊は欠かせない。細く均等なキャベツの千切りに憧れ、一時期ずっと練習していた。

武田 淳 准教授

【文化政策学部 国際文化学科】

埼玉県出身。研究地域はコスタリカとパプアニューギニア。研究の関係でコーヒー豆や器具をプレゼントされることが多く、研究室には焙煎機も備える。コーヒーを淹れるのが趣味だが、ブラックコーヒーは苦くて飲めない。

栗山 はなこさん

【文化政策学部 国際文化学科 1年】

静岡県出身。大学やアルバイトなど頑張った日は、大好きな有名コーヒーチェーンで癒しをチャージ。幼い頃から店員さんと会話するのが趣味。いつか店員として働きたいと、スタッフ募集はこまめにチェック。



学生おすすめ 浜松市内の

エシカルスポット

エシカル消費とは人や社会、地域、環境に配慮した消費のことです。
フェアトレード商品を選ぶことも人・社会に配慮した消費としてエシカル消費に含まれます。

1 浜松メープルシュガー工房

浜松市中央区和地町4766-2

カナダ産オーガニックメープルの「シュガー」を販売する浜松メープルシュガー工房は、輸入から加工、販売まで一貫して行っています。無添加で栄養豊富なメープルシュガーは、賞味期限が長くフードロス削減にも貢献する地球にも身体にも優しい商品です。



2 菓子巧房 ほほえみ

浜松市中央区蛸塚3丁目17-7

和洋菓子店のおすすめ「レモンケーキ」は、浜松産レモンを使用し、皮を煮て活用するエシカルな商品。加工は福祉事業者が担当し、障がいを持つ方の社会進出を応援。地産地消と環境配慮でみんなが笑顔になるスイーツです。



3 zakka + fairtrade 晴天

浜松市中央区有玉南町2350-4

コーヒーや紅茶などの食品、天然素材の服や雑貨など幅広い商品を取り扱うフェアトレード専門店。ホームレスの仕事づくりを応援する「ビッグイシュー」も販売。お買い物でよりよい世界、社会になるきっかけ作りの店を目指しています。



4 遠州綿紬ぬくもり工房

浜松市浜名区染地台3-12-25

遠州綿紬を扱うお店では、伝統を活かした商品づくりが特徴。中でも「遠州綿紬ハンカチ」は、60年間も使用される織機で織られ、使うほど柔らかく手に馴染む風合いが魅力。大量生産品とは異なる温かみが際立つ逸品です。



5 Naturest 自然栽培ローゼル

浜松市中央区大島町1404-2

自然栽培の野菜や生はちみつを販売するお店では、ハイビスカスのつぼみ「ローゼル」のハーブティーが人気。農薬・肥料不使用で栽培し、障がいを持つ方が草取りや梱包にも参加。共生社会を体現したエシカルな商品です。



6 生活クラブ生活協同組合 浜松センター

浜松市中央区並井新田町657-1
＊配送センターにつき店舗はなし
(上記は事務所の住所)

国産・無添加・減農薬にこだわる生協が販売する「温州みかんジュース」は、国産の温州みかん一個一個の外皮をむいて搾ったストレート果汁。瓶のリユースやビニール袋のリサイクルなど環境配慮も徹底され、地球にも身体にも優しい商品です。



7 友愛のさと わごむ

浜松市浜名区高園775-1
浜松市発達医療総合福祉センター
(はままつ友愛のさと)内

「わごむ」は浜松市発達医療総合福祉センターの利用者が作る、障がいを持つ方の社会進出を応援するエシカル商品。一つ一つ異なる個性豊かな作品が特徴で、ものづくりの過程を大切に、温かみを感じられます。



SUACフェアトレードのあゆみ

2012年

- 「りとるあーす」が「Teebom(静岡市)」、「ひまわり工房(掛川市)」との協働で、**フェアトレードクッキー「メリエンダ」**開発。



2011年

- フェアトレードの啓発と推進を目的とした学生団体「りとるあーす」発足



2016年

- 大学と学生団体「りとるあーす」が中心となり「**静岡文化芸術大学フェアトレード憲章**」を策定

2017年

- 浜松市が**日本で4番目のフェアトレードタウン**に認定
- 「りとるあーす」が「就労継続支援 B型事業所 工房いもねこ」との協働で富士山をモチーフにしたお菓子「**ふじのくにアリエッタ**」を開発



認定
2018年

- 国内初「**フェアトレード大学**」認定(2018.2~2021.10)
- 浜松市長へ**国内初のフェアトレード大学**に認定されたことを報告

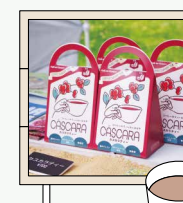


認定
2021年

- 「**フェアトレード大学**」再認定(2021.10~2025.1)
- 卒業証書フォルダの内側台紙に**フェアトレードペーパー**を採用
- フェアトレードコットン**を使用したトートバッグを製作

2020年

- プロジェクトチーム「カスから生まれるプロジェクト」による「**カスカラティ**」商品開発
- フェアトレードに特化した授業「**フェアトレード論**」を開講
- 教職員の名刺に**フェアトレードペーパー**の名刺を選択制で採用



2022年

- プロジェクトチーム「はままつチョコプロジェクト」が企画し、「(有)春華堂」が製造した**フェアトレードチョコレート「ピナショコラ」**を開発&販売



2023年

- 「カスから生まれるプロジェクト」が**静岡県地球温暖化防止活動知事褒賞**を受賞



2024年

- 「りとるあーす」がタオルメーカー「**ホットマン(株)**」とのコラボ企画で**セネガル産のフェアトレードコットン**を使用したオリジナルタオルを商品化
- 「カスから生まれるプロジェクト」が令和6年度**気候変動アクション環境大臣表彰の普及・促進部門 緩和・適応分野で「気候変動アクション大賞」**を受賞。



認定
2025年

- 「**フェアトレード大学**」再認定(2025.2~)

TOPIC 03

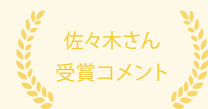
本学学生の作品が 「日本学生BtoB新聞広告大賞」で協賛企業賞受賞



デザイン学部3年の佐々木泉さんが「第9回日本学生BtoB新聞広告大賞」で「協賛企業賞」を受賞しました。このコンテストは、学生が企業・製品・サービスの新聞広告を制作し、優れた作品を表彰するものです。協賛企業から提示されたテーマに基づいて広告作品が広く募集され、佐々木さんの作品が評価されました。

作品名「恋の電流は止まらない!でも…」

課題提供 三菱電機株式会社



佐々木さん
受賞コメント

コピーライターを志しているの、発想の面白さや製品の魅力の伝え方の工夫点を評価していただけたのが嬉しかったです。
今回の経験を活かし、これからも精進してまいります。

TOPIC 04

モードのジャポニズムを語る― 深井晃子先生の講演会が盛況に開催されました



本学国際交流センター主催の講演会が開催され、服飾文化研究の第一人者である深井晃子先生（本学初代芸術文化学科長、文化政策研究科長）をお招きし、「モードのジャポニズム ―欧米を魅了する日本―」をテーマにお話いただきました。講演では、深井先生が本学に着任した経緯やパリでの生活、「モードのジャポニズム」展覧会の経験、日本の着物文化が海外のファッションや絵画に与えた影響などについて、貴重な写真を交えて解説されました。参加者は熱心に聴講し、学生、卒業生、一般の来場者を含む200名が集まりました。

SUAC 公式サイト

Webサイトでも本学の教育・研究や在学・卒業生の活躍など、トピックスをご紹介します。

<https://www.suac.ac.jp/topics/2024/>



SUAC 公式X (旧Twitter)

公式X (旧Twitter) アカウントでは、日々の学内での出来事やイベントなどをご紹介します。



@suac_official

TOPIC 01

本学学生が週刊少年ジャンプ 『赤塚賞』で佳作受賞

デザイン学部3年藤森諒さんの作品が、週刊少年ジャンプ「第101回赤塚賞」で佳作を受賞しました。週刊少年ジャンプ「赤塚賞」は、集英社が主催する少年向けギャグ漫画の新人募集企画です。漫画界の登竜門であり、受賞者の中からプロの漫画家を多数輩出しています。



受賞作品「モグ男は救いたい」

ストーリー

少年に飼われているモグラ・モグ男は巣穴から一歩も出ない引きこもり。そんな彼がモグラ叩きを救うため、遂に巣穴から外へ出た!!ゲームセンターに殴り込みに行ったモグ男だが…



藤森さん
受賞コメント

学生のうちに受賞するのが目標だったので達成できてよかったです。これからも頑張ります。



TOPIC 02

中村建設(株)創立70周年記念ロゴマークに 大学院生のデザインが採用されました



浜松市の総合建設業・中村建設株式会社の創立70周年を記念したロゴマークに、デザイン研究科1年の田中晴己さんの考案したデザインが採用されました。

採用された田中さんの作品は、同社70周年を象徴するロゴマークとして、工事現場の看板や名刺、記念行事等で使用されます。

作品は「未来に向かっていくように感じられる、洗練されたもの」をコンセプトに制作。70の形を幾何学的に分解・再構築し、それぞれの方向性や形態にこれからの発展の意が込められています。



田中さん
受賞コメント

私の専攻は建築ですが、かねてよりグラフィックデザインにも興味があったため今回のコンペに挑戦しました。創立70周年記念のテーマである「伝承と飛躍」を表現しつつ、中村建設の企業ロゴマークとの整合性を考慮してデザインしました。

研究紹介 02

北遠地域に伝わる祭祀芸能の総合的研究

- 文化政策学部 国際文化学科 教授／二本松康宏(研究代表者)
- 文化政策学部 芸術文化学科 准教授／田中裕二
- 文化政策学部 国際文化学科 教授／西田かほる
- 文化政策学部 芸術文化学科 教授／奥中康人
- 文化政策学部 国際文化学科 客員研究員(当時)／宮嶋隆輔



▲南信州坂部の冬のうたの実演披露
(本学講堂)

浜松市天竜区横山町は、かつて天竜川水運の川湊として繁栄しました。川を下る船頭や筏師、木材の買い付けに訪れる材木商、そして遠州と信州を往来する商人たち。天竜・二俣から水運を経て信州へいたる秋葉街道(信州往還)と三河の鳳来寺と遠州の秋葉神社とを結ぶ秋葉街道(鳳来寺道)。二つの秋葉街道が横山で繋がります。そうした賑わいと豊かさのなかで、横山八幡神社には正月の祭礼と芸能が伝えられてきました。江戸時代後期に内山真龍が著した『遠江国風土記伝』によれば、神事は正月元日から十日まで、あるいは二日から十五日まで及んだとも記録されています。



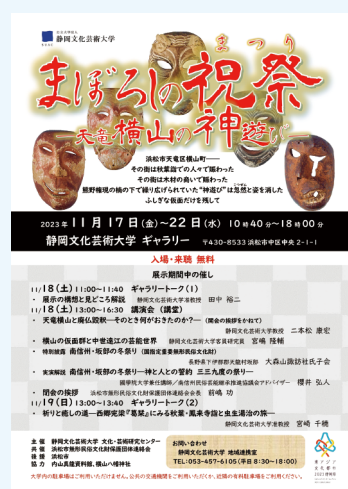
▲仮面の展示(本学ギャラリー)

しかし、明治七年(一八七四)、その祭礼は忽然と廃絶してしまいました。祭礼の芸能に使用されたと考えられる十一枚の面とわずかな祭具だけを残して。令和五年十一月、浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会と浜松市文化財課のご協力をいただき、内山真龍資料館に寄託されていた十一の面と祭具を静岡文化芸術大学で展示・公開しました。もちろんただ展示するだけではありません。かつての横山で催されていた正月の神事とはどのようなものだったのか？明治七年に祭礼が廃絶した背景とは？私たちは、展示を通して横山に伝わった「まぼろしの祝祭」の解明に挑みました。

面(めん)の学術的考証を担当したのは当時、本学の客員研究員だった宮嶋隆輔氏です。宮嶋氏は横山八幡神社の十一の面を近隣の「横山おくない」「神沢おくない」「西浦田桑」などで使用されている面と比較することで、その用途(演目)を推考しました。たとえば、これまで「うそふき」と呼ばれていた面は、実は「鬼神面(ひん)」に対して表裏に位置する「もどき」であることがわかりました。鬼神の厳めしさが魔を鎮め、その「もどき」が面白おかしく戯れの笑いを誘います。笑いもまた邪気を祓うのです。

明治元年(一八六八)に新政府が発した神仏分離令は、まもなく廃仏毀釈という過激な運動へと展開しました。その暴風は北遠にも吹き荒れます。明治七年、横山八幡神社(熊野権現社)に祀られていた仏像が社殿から撤去されることになりました。正月の神遊(みこめぐり)が廃されたのもこのときです。ところが、私たちが調査を進めるなかで、横山の宝珠院の観音堂に祀られる十一面観世音菩薩像が、なんとかつての熊野権現社の本尊だったことが判明しました。明治十三年(一八八〇)に記録された『宝珠院明細帳』によれば、明治七年の神仏分離に際して、熊野権現社の本尊である十一面観音像を宝珠院に移し、境内に仮堂を建てて奉祀したといわれています。村人たちは、表面には廃仏に従いながら、「古来当村氏神の本地仏」(『宝珠院明細帳』)を密かに匿つたのです。その宝珠院の観音堂では毎年一月五日に法要が営まれます。本来、観音の縁日は十八日と決まっています。宝珠院における一月五日の観音の法要は、おそらくかつての熊野権現社で催されていた正月の祝祭の記憶に違いありません。

一方、横山八幡神社にもかつての正月の祝祭の記憶は受け継がれていました。一月七日に執り行われる湯立て神事もまた、おそらくは正月の祝祭の一部を伝えるものと考えられます。神と仏の共生を密かに守り伝えてきた横山の人々のしなやかな心意気が伝わってきます。



▲「まぼろしの祝祭 天竜横山の神遊び」開催案内

TOPIC
05

地域の魅力を伝える！佐久間分校生と本学学生が共同でカレンダーを制作しました

浜松市天竜区佐久間町にある静岡県立浜松湖北高等学校佐久間分校の生徒と共同で「佐久間分校生推しスポット 地域カレンダー2025」を制作しました。このプロジェクトは、文化政策学科の船戸修一教授が担当する地域連携演習の一環として行われ、学生8名が地域の魅力を発信するために取り組みました。カレンダーには、佐久間町や周辺地域の四季折々の風景や行事が紹介されています。佐久間分校は生徒数減少による廃校の危機に直面しており、カレンダー制作は地域の魅力を伝え、入学希望者を増やすことを目指しています。1部1,000円で販売され、購入者が地域の課題解決に貢献できるよう支援を呼びかけました。



TOPIC
06

4年間の集大成！「卒展」が開催されました



デザイン学部・大学院デザイン研究科の学生たちの学びの集大成である卒業制作と修了制作が展示される「デザイン学部卒業展・デザイン研究科修了展(通称:卒展)」。



就職状況

2025年3月卒業予定者(現4年生)については、1月末時点での内定率が89.2%となっています。昨年度同様、就職活動は売り手市場となっており、多くの学生が複数の内定を得ています。一方、未内定の学生に対しては、志望の状況に応じた求人情報の提供等により最後まで支援を継続していきます。

また、2026年3月卒業予定者(現3年生)については昨年度以上に採用活動の早期化が進んでいる印象です。

次年度以降も今年度と同様の状況を見込んでいますが、状況の変化に即したガイダンスやセミナーの実施と個別のきめ細やかな対応によって個々の力を引き出し、学生一人ひとりの志望が実現できるよう支援していきます。

キャリア支援室より

Career Support Office



就職イベントの実施



「就Café」の開催

11月27日(水)、本学食堂で、浜松市・浜松商工会議所と協力し、学生のためのキャリアイベント「就Café」を開催しました。ドリンクやスイーツを楽しみながら、参加企業6社の方々と就職について話し、企業研究も行えるというイベントです。各ブースでは時折笑い声が起こり、学生も積極的に質問するなど、終始なごやかな雰囲気で行われました。

参加した学生からは大変好評で、中には6社全てのブースを回った学生もいたようです。

参加の動機は様々でも、学生がこれからの自分のキャリアについて考えるよい機会になったと思います。

ご家族のための キャリア説明会

11月3日(日)、碧風祭の開催に合わせ1～3年生のご家族を対象に、本学大講義室で学部別に「ご家族のためのキャリア説明会」を実施しました。

SUAC生の就職活動状況報告や、教務・学生室による成績・授業・学生支援・留学等についての説明の後、コロナ後の社会動向を踏まえた就職活動の進め方やご家族にお願いしたいサポート内容について講演を行いました。

後半は卒業生によるパネルディスカッションで、就職活動での苦労話や反省点、うまくいった点などについてリアルな体験談をお話いただき、学生目線での気持ちなどもご家族様にお伝えすることができました。



[研究分野]

芸術社会学/
文化政策論/
アートマネジメント論



「アート」×「多文化共生」の 答えを探究して

南田 明美 講師

文化政策学部 芸術文化学科

Profile

大阪府出身。大阪音楽大学卒業後、神戸大学発達科学部人間表現学科表現文化論音楽学教室に編入学。神戸大学大学院国際文化学研究科博士課程後期課程修了(学術博士)。日本学術振興会特別研究員PD、九州大学大学院芸術工学府非常勤講師を経て2022年より現職。授業では現代社会と芸術文化、文化施設の管理と運営、芸術文化演習IBなどを担当。

私は、いわゆるヤングケアラーとして、6歳のころから母親の介護をしていました。そのため、他の子どもたちのように親に甘えることができませんでした。とにかく社会のなかで生き抜くため、周りの人の真似をして行動していた記憶があります。

例えば、お弁当を自分で作ったのに友達に合わせるために母親が作ってくれた」と嘘をついてごまかしていました。でも、そういった小さな嘘を重ねるうちに、自分自身も苦しくなっていたんです。

一方で、父親が他の多くのみんなと同じ職業だったこともあり、クラスでは多数派に属している感覚がありました。自分の中で、「少数」と「多数」が入り混じる、家や学校に本当の居場所があるのかどうか分からない、曖昧な気持ちで過ごしていました。さらに、私の近隣地域は被差別部落と在日コリアンの問題が根深い場所だったため、「差別と抵抗」という現実を身近に感じながら育ちました。「普通」ではない状況

況がいくつも重なり合っている、そんな幼少期だったと思います。

夢×音楽

自分と同じように辛い思いをしている子どもたちを、自分のスキルで助けたいという思いから「教員」になりたいと考えていました。また、世界中で苦しんでいる子どもたちを支えられる仕事をしたいという夢もありました。

そんな中、中学生の時に姉妹校のあるシンガポールを訪れたことが転機となりました。そこで現地の学生たちとオーケストラと一緒に演奏する機会があり、私は英語がほとんど話せませんでしたが、音楽を通じて心が通じ合う体験をしました。その瞬間、音楽の力があれば国や言葉の壁を越え、人を助けることができることを確信しました。この経験がきっかけで音楽大学への進学を決意しました。

今でも当時知り合ったシンガポールの友達と連絡を取り合っていてとても仲良しです。

アウトリーチ活動に励む

音楽大学で音楽療法や演奏の仕事を通じて、アウトリーチ活動について学ぶ中、大阪センチュリー交響楽団の「センチュリー・ユースオーケストラ」に入団しま

した。この楽団は単にプロの演奏者としての技術を磨くだけでなく、オーケストラを通してよき社会人となることを目的としていました。定期演奏会のみならず、街中で演奏する機会も多くありました。こうした活動を通じて、音楽アウトリーチ活動の企画方法やその魅力を深く学ぶことができました。

さらに、大学4年生の時には、当時の大阪府知事主催の「橋下文化行政に物申す」という公募に選ばれ、文化行政のあり方について意見交換を行う機会を得ました。この意見交換会を通じて、文化行政や文化政策の重要性を強く実感し、それを専門的に研究するために大学院へ進学しました。研究では、「アートは多文化共生に寄与できるのか」をテーマにシンガポールの地域に根ざした芸術文化活動に焦点を当てました。シンガポール人の友人との文通で、それらの活動が盛んであることを知っていたのですが、先行文献が少なかったため、現地調査を行いました。

苦しむ人を二人でも 増やさないための居場所

私は現在、アートや音楽を通じて、どうすればみんなが安心して集える「憩いの場」を作れるかを研究しています。

研究室では、シンガポールの事例を参考にしながら、浜松の外国人集住地区で音楽ワークショップを実践研究し、その成果を発表しています。活動を始めたばかりの頃、自治会役員の高齢者の方から「何をやっているんだろう?」と不思議そうに見られることもありましたが、子どもたちが楽しんでる様子が伝わったのか、最近では自治会から直接声をかけてもらう機会も増えています。

音楽ワークショップの実践により、関わる人たちだけでなく、もっと多くの人たちに意識を変え、きっかけを届けたいと思っています。そして、心にモヤモヤを抱えた人たちと一緒に考え、伴奏者として寄り添える存在となればと考えています。



南田先生が選ぶ一冊

「被抑圧者の教育学」

著:パウロ・フレイレ 訳:三砂ちづる

社会では、何らかの秩序に従っている方が楽ですが、秩序には抑圧装置がたくさんあります。詰め込み型教育での「いい子」になればなるほど、自らをその抑圧装置の中に入れてしまいます。この本では、従来の一方的な教育を否定。対話を通じた批判的意識の形成を重視し、教育を社会変革の手段と捉え、抑圧からの解放を目指す実践と理論を結びつける深い洞察が得られます。

ご意見・ご感想をお寄せください

広報誌に関するアンケートにご回答いただいた方の中から
抽選で5名様に大学ノベルティグッズをプレゼントします。

応募方法

2025年4月30日(水)までに、二次元コードより
アンケートフォームにアクセスし、
回答してください。

※当選者の発表はプレゼントの発送をもってかえさせていただきます。

コチラから
アクセス



本学卒業生が
ボールペンの
プロダクトデザインを
担当しました！

present /
SUACダブルリングノート&水性インキボールペン(黒)



静岡文化芸術大学同窓会だより

碧風祭2024

碧風祭は卒業生が大学に集う日: Homecoming Dayです。今年度は、多くの卒業生にお越しいただけるよう500円分のSUACチケットを郵送させていただきました。当日は、多くの来場者様の中に卒業生の姿をお見掛けすることも多くうれしかったです。(SUACチケットのご利用状況から約150名近い卒業生が参加していただきました。)

国際交流センター主催 講演会

11月20日水曜日に初代芸術文化学科長、文化政策研究科長の深井晃子先生をお招きし「モードのジャポニスム」の講演会が本学講堂で開催されました。当日は、ゼミ生など卒業生もご来場いただきありがとうございました。講演後には、深井先生ともご歓談いただき貴重な時間でした。詳細は本学HPをぜひご覧ください。

大学公式HP
トビックス



今後の活動について

碧い風を卒業生のみなさまにお届けしていましたが、前回(2024年10月)の送付が最後となりました。今後は、年に1回のお知らせやオープンチャットの開設を検討しています。また、2026年度には、開学25周年を記念した事業を計画しています。卒業生の皆様も「こんなことをしたい・してもらいたい」というご意見等ありましたら、同窓会までご連絡ください。

コチラ▶▶▶ 静岡文化芸術大学同窓会 E-mailアドレス: dousou@suac.ac.jp

静岡文化芸術大学基金 (教育研究支援・修学支援事業) 寄附者ご芳名

2024年8月1日から
2024年12月31日まで

ご寄附を頂戴した方々のご厚意に心から感謝を申し上げますとともに、
謹んでご芳名を掲載させていただきます。今後、学生が行う海外留学
の支援等に充てさせていただきます。皆様には引き続きご理解とご支
援を賜りますようお願い申し上げます。

寄附金額 1,259,000円 (内訳: 教育研究支援1,189,000円、修学支援事業70,000円)

寄附者ご芳名

(五十音順、敬称略)【個人】

稲川望

松本賢太郎

熊田洋之

村松秀人

下位智

横田一成

杉山秀雄

横山俊夫

永井良和

※ご芳名の掲載を希望されなかった方(13名)を除いて掲載しております



基金について

退任教員紹介

RETIRED FACULTY

デザイン学部 デザイン学科(建築・環境領域)(インタラクション領域兼任)
パブリックデザイン

在職期間: 2009年4月 ▶ 2025年3月

磯村 克郎 教授

デザイン学部の実務型教員として赴任と同時に、前職からのプロジェクトを受託事業にいただき、学生たちとデザイン活動を行いました。これ以降、毎年のように企業や自治体とのプロジェクトで、公共のデザイン、まちづくりのデザインに取り組みました。また、これらのデザインプロセスを見直したデザイン方法論を所属している芸術工学会で研究報告を行いました。一方で、最初の頃は授業の教材づくりに追われ、他の授業を見学させていただき、なんとか担当の授業を行いました。今でも授業前の修正などに苦労しています。領域横断型や地域連携の授業と組織にも取り組み、デザインの方向性のひとつに関われたことは、思い出深いものとなっています。ご一緒した地域の方々、学生のみなさん、教職員の方々、どうもありがとうございました。



学生や研究室のまちづくりのデザインを街中で展示したものです。

文化政策学部 文化政策学科

情報アーキテクチャ

在職期間: 2000年4月 ▶ 2025年3月

野村 卓志 教授

大学が開学した年から25年間、ちょうど四半世紀にわたって在職させていただきました。開学の頃に学生さんたちと教職員の皆さんが本大学の校風を作ってゆく時期を共にしてもらえたのは印象深かったです。その一方で、大地震で入試業務が影響を受け、またパンデミックによる大学閉鎖など、映画を思わせるような出来事が次々と起きるとは予想もしていませんでした。大学閉鎖の時には LMS (learning management system) である SUAC manaba の導入に尽力させていただいたうちのひとりとして、本当に良かったと思ったものでした。様々なことがありましたが、学生さんたちが成長する姿を見させてもらったことは、私にとってかけがえのない思い出です。

デザイン学部 デザイン学科(プロダクト領域)
プロダクトデザイン

在職期間: 2000年4月 ▶ 2025年3月

佐藤 聖徳 教授

教育・研究の場としてこの遠州の地の大学に在職し、世界を観察しながらちょうど四半世紀の時間が経ちました。開学から仕事に携わることが出来た、稀有な25年間でした。振り返ると、とても不思議でなりません。ここに赴任してから、想定外の密度で様々なことがありました。良いことも厳しかったことも。まずデザインを目指す若い力の微力になれたかもしれない事実。そして人生のパートナーとの出会い、自身の作品制作活動を研究という形で俯瞰する方法を知ったり、地域の方々との楽しい交流や、あり得ないような災害に遭遇し命拾いをしたり。思い返す時、映像を倍速で眺めているように感じます。今後もすべてに感謝し、もう暫く遠州の力になりたいと考えています。どうもありがとうございました。



文化政策学部 国際文化学科

イギリス口承文芸

在職期間: 2001年4月 ▶ 2025年3月

美濃部 京子 教授

静岡文化芸術大学には開学から(最初の1年は非常勤として)25年間、前身の静岡県立大学短期大学部から含めると35年間、人生の半分以上を浜松で過ごしたことになります。私にとって浜松は紛れもなく第2の故郷になりました。赴任したころは、イギリスの昔話とバラッドについて研究を進めるつもりでいたのですが、学生に講義をするうちに「シンデレラ」やわらべうた、現代伝説のほうにも興味が広がってきました。また、縁あってスコットランドやウェールズを訪問する機会を得ることで、イギリスの文化基盤についても深く考えるようになり、Jack Tales との出会いに興味をアメリカのアパラチア山地にまで広がってくれました。今後は、本学で得た財産を後世に残していくことに努めたいと思います。



SUAC'S OB

卒業生の活躍

PROFILE

浜松ケーブルテレビ株式会社
コンテンツ部 コンテンツグループ

いまい あずさ
今井 亜寿紗さん

□ 2018年 文化政策学部芸術文化学科 卒業

山形県出身。2018年、文化政策学部芸術文化学科卒業。
浜松ケーブルテレビ株式会社ウィンディに入社し、営業部を
経て撮影や原稿作成、編集など番組制作を担当するコンテ
ンツ部 コンテンツグループに所属。地域の魅力を伝える番組
「みんなの週刊!だもんDE浜松」などの制作を担う。

～みんなの週刊!だもんDE浜松～▼

<https://youtu.be/m39jJhLvFc?si=r9bk DdHLggwYdt>

地域に根付いた 「あたたかい」番組づくりを目指して

山形県で生まれ育ちました。小さい頃から絵を描くことがと
にかく好きで、将来の夢はデザイナー。また、中学進学以降
は文章執筆、演劇やコントの鑑賞が好きだったこともあり、
脚本家にも興味を持つようになりました。

大学選びについては、演劇などの研究や脚本を書くことの
できる学校やゼミを探していて、SUACの芸術文化学科、
梅若先生のゼミで現代劇の脚本を書くことができるとの情
報を発見し、さらに進路研究を進めていく中で芸術やそれを
取り巻く社会について多角的に学ぶことができると分かり、
私自身音楽や絵画など芸術を幅広く好きだったので、まさに
ぴったりだと感じてSUACを選びました。

入学してからは「芸術表現」や「劇場プロデュース論」など演
劇に関連する授業を中心に履修してきました。そこにはユニ
ークな先生方も多く授業がとても楽しかったことを今でも
覚えています。また、憧れであった梅若先生のゼミに所属し、
能や狂言の世界に足を踏み入れました。学内で実施した能
の公演では、先生からのお誘いもあり新作狂言の脚本制作
にゼミのメンバーと挑戦しました。本番の舞台でプロの狂言
師の方に自分たちの書いた脚本を演じていただき、学んで
きたことが目に見える形となって仕上げられる高揚感で胸が
いっぱいになりました。卒業が近づく中、大学生活で得てき
たことを形に残したいという思いもあり、学生有志の演
劇公演を主催することにしました。会場確保や脚本制作、舞
台演出等すべてゼロからのスタートでしたが、演劇サークル
に声をかけて出演してもらったり、デザイン学部の方にポス
ターデザインをお願いしたりと、周囲の方に助けられながら
当日は満席の会場で無事に実施することができました。

SUACは、したいことを自由にできる雰囲気があります。あれ
もやりたい、これもやりたいという思いを何でも受け止めてく
れて応援してくれる……一つ一つのことですぐに成果が出た

り、何かに直結したりということはなかったかもしれないけれ
ど、学生時代の経験の蓄積が思いもかけない発想につな
がったということは、仕事をしていても感じるがあります。
卒業後は、静岡県内でクリエイティブな仕事がしたいという
思いから浜松ケーブルテレビに就職。コンテンツ部門で、取
材やロケ、映像の編集、リポーター等番組制作に関わる全て
の業務に携わっています。

現場での実践を重ねるうちに、取材した方の人柄をどう引き
出すか、どのように番組構成をしたら面白くなるかなど自分
なりの工夫やこだわりを反映させる余裕も少しずつできま
した。自分の中で納得できる番組が完成した時には何もの
にも代え難い喜びと達成感がありますし、視聴者の方から
「次回も楽しみにしてるね」というお声をいただくこともあり、
とてもやりがいを感じています。

今後の目標は、地域に根付いたテーマでドキュメンタリー番
組を制作することです。地域の視聴者の方々に番組を楽し
んでもらうことはもちろん、「感動」や「心に刺さる」番組をお
届けすることができればクリエイター冥利に尽きると思いま
す。機会があればぜひSUACともコラボレーションして何か
一緒に企画ができれば嬉しいです。



みんなの週刊!だもんDE浜松「浜松西高 100周年記念特集」
企画・撮影・編集を担当

編集後記

SUACの取り組み、旬なトピックスなどの情報を広く知っていただくために発行している「碧い風」は、今回で20号となりました。学生歌でもある「碧い風」というタイトルは、当時、学生からの公募により決められました。今後も皆様に愛される広報誌作りに努めてまいりますので引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

広報誌に対するご意見、ご感想をお待ちしています。